

一心寺かわら版

第十七号 平成二十一年九月発行

宗祖親鸞聖人七百五十回大遠忌

法要テーマ「いのち・つながり・よろこび」

大遠忌（だいおんき）について

浄土真宗の開祖、親鸞聖人は鎌倉時代の混乱した時代社会にあつて、苦悩する人々と共に生き、苦悩の衆生を救う正法、浄土の真宗を開かれました。そのご生涯は「興隆正法」の願いに貫かれ、その志をもつて興正寺を建てられました。

平成二十三年は、親鸞聖人の七百五十回忌の年にあたります。真宗興正派・本山興正寺ではその一年間を「親鸞聖人讃仰の年」と位置づけ、四期にわけて大遠忌法要をお勤めいたします。

この法要が、本願念仏に遇い得た喜びを共に分かちあう、お念仏の華咲く場として、たくさんの方にお参りいただけるよう願っております。

法要テーマについて

今を生きる私の「いのち」は、数多くの「いのち」とのつながりによって、響きあい、そして育まれています。しかし、人生の様々な苦悩の闇が深くなっていく現代社会では、なかなかそのつながりを実感できないのではないのでしょうか。無量の「いのち」を持つ大いなる存在（仏）から私たちが一人ひとりに願いがかけられています。その「願い」を聞き、仏との「つながり」を感じ、

仏と共に歩むその時、人生の苦悩の次元を超えた世界が開けます。七百五十回忌の法要が、阿弥陀仏という大いなる存在に出会い、生きている「よろこび」を味わうことのできる機縁になればと願っています。
(本山興正寺パンフレット抜粋)



前進座公演「法然と親鸞」

去る六月二十日、アルファあなぶきホールにて催された前進座公演「法然と親鸞」、当山からは十名が、各地から二五〇〇名もの人が観劇しました。四国新聞で五木寛之氏が『親鸞』を連載されていますが、その物語には史実と異なっていたり、創作されたりするところがあります。今回演じられた「法然と親鸞」も少なからず創作されていますが、法然上人と親鸞聖人の願いを伝えたいという熱意がひしひしと感じられました。そのストーリーをひも解いてみましょう。

第一幕

平安の末から鎌倉時代初めにかけて—

永治元（一一四一）年、春の夜更け。

美作（みまさか、いまの岡山県北部）の豪族、漆間時国は、夜襲にあつて討死。わが子、勢至丸（法然の幼名）に、「敵を怨むな、私の菩提を弔いながら、人としてのまことの道を求めよ」と遺言し、九歳の少年は、母の指図で仏門に……

承安五（一一七五）年、春の夕刻。

長じて少年は、法然房源空を名乗る。ここは比叡山黒谷の「一切経」五千巻余を納める報恩蔵。法然はすでに全巻を五度読み返し、今は善導大師（中国唐代の僧）の「観経疏（かんぎょうのしよ）」を一心に読みふけていた。



母を残して故郷を離れ、もう三十年。訪ねてきた旧家臣の栃之助から母の形見の和歌と遺書を渡された法然は、地に伏して号泣。やがて経蔵に戻り、夜を徹して「観経疏」を読みつぐ。「彼の仏の願に順ずるが故に（阿弥陀仏の御名を称えることが仏の願いにならう）……」何回も読み過ごしてきた文章の一節。法然は歓喜にふるえ、念仏を称える。

叡山を下りた法然は、西山の広谷へ、ついで東山の吉水に移つて庵を開き、一切の差別を排して、老若男女、僧俗貴賤を問わず、教えを説いた。

文治二（一一八六）年。

南都北嶺の高僧たちは、法然の説く「専修念仏」の教義を糾そうと法論を挑む。所は大原の勝林院本堂。頭真法印（のちの天台座主）をはじめ、諸宗の碩学たちを向うにして、舌鋒鋭い問いに一步も引かず、「一切の衆生を救う阿弥陀仏の心」を諄々（じゅんじゅん）と説く法然房源空……



この前年、平家滅亡。七年後、鎌倉幕府が開かれる——だが兵乱・災害・疫病は止まない。弟子の信空、在家の茂右衛門・お虎夫婦らと、賀茂の河原で難民に粥を施しながら、人びとと語りあう法然。米が尽きる。と、前関白、九条兼実に仕える筑前（のち恵信尼）が、侍女の小竹を従え、男たちに米俵をかつがせてきた。歓声がわく。いっぽう、範宴（はんねん、のち親鸞）は、洛中の底冷えのする、聖徳太子に由縁（ゆかり）の六角堂に百日の参籠をつづけ、煩惱に苛まれる己の生きるべき道を求めていた。あと五日で満願の夜更け、範宴を慕う筑前が堂外に佇んで合掌……

第二幕

東山の麓（ふもと）にある吉水の庵室。遊女の山吹や琴路ともわけ隔てなく語り合う法然。そこへ夢で「太子のお告げ」があったから、と、範宴が訪れる。「恋は罪悪でしょうか」の問いに、「念

仏が申しよいなら妻をめとるもよし」と答え、
乞われて綽空（しゃくくう）の名を、そののち
綽空は法然より「選擇本願念仏集」を付属され、
名を善信と改める。

建永二（一二〇七）年二月。

興福寺の衆徒の強訴で、専修念仏への迫害は
激しくなる。上皇寵愛の官女が尼になったこと
を理由に、根も葉もない破戒坊主の汚名を着せ
られ、安樂房は六条河原で打ち首に。都大路に
は僧兵がのし歩き、念仏者とみれば狼藉（ろう
ぜき）をはたらく。前関白のはからいで、法然らは、小松殿と呼
ばれる洛東の九条家の



館に難を避けていた。

そこへ法然は土佐へ
流罪と決まった、という
知らせ。『念仏停止』の
命に背いたと、僧侶の資
格も法名もとりあげら

れ、ついで善信（親鸞）もまた、同じ罪名と同じ仕打ちで越後へ
流刑と……。

「念仏を国のすみずみにまで広めるまたとなき機縁」。見送る一同
の念仏の高唱に送られて、法然は旅立つ。ときに七十五歳。

老師との別れぎわに蓮生房（もと熊谷直実）は、師に代って美
作の漆間の墓に念仏を手向けにゆくと告げる。



第三幕

建永二（一二〇七）年の晩秋。

越後の荒川は氾濫（はんらん）をくりかえす暴れ川。この地へ
流された善信は、みずから愚禿（ぐとく）親鸞と名乗り、弟子に
なったもと武士の覚善、その女房やよえ、村の男源太、おなじく
女けさ、村人たちといっしょに土堤の普請をしている。

雪がやがて吹雪に。と、筑前の姿が……。噂を聞いて駆けつけ
たという。越後はその故郷。親鸞は彼女の法名を恵信（えしん）
とした。

建暦二（一二二二）年の冬。

越後・竹ヶ前の草庵。前の年に赦免された親鸞が恵信尼と暮ら
す住居。布教から戻ってきた親鸞に、恵信尼は夕餉（ゆうげ）の
膳をととのえる。戸を叩く音。腹へこの男が雪まみれで転げ込む。
膳のものを平らげ、恵信尼のすすめる薬酒を飲みほすと、やおら
白刃を抜いて……。十年前、六角堂で出会った捨て子の五郎太だ
った。国府の役人が駆けつける。親鸞夫妻は、五郎太をかばい、
逃がしてやる。

覚善が、京からきた旅姿の横曾
根の性信を案内してくる。この正
月、法然上人は浄土へ逝かれたと
いい、遺戒として認（したた）め
られた「一枚起請文」の写しが示
される。それは「只一向に念仏す
べし」と結ばれていた。



夫妻は京へは戻らず、信濃から下総、下野、武蔵と東国の旅をつづけた。

元仁元（一二二四）年の初夏。

常陸・稲田草庵。二人のあいだには乳呑み児の王御前（おうごぜ）がいた。小竹や漁師の女房まつ、村の女たちが、すべて恵信尼の指図で薬草を乾している。



野良帰りの農夫、猟師、漁夫、商人などさまざまな生業（なりわい）の男女が、親鸞の法話を聞こうと集る。遅れてくるのは葛籠（つづら）を背負った弥七。話がはじまる。突然、葛籠から半裸の女が、念仏を唱えながら飛び出す。弥七の女房のとよ。「着物がないんで、でもお話

が聞きたくて我慢できずに」と……。 「身を飾るより真実の心がたいせつ」と説く親鸞。

三日後の夜――。

もの蔭から大刀を腰にした五郎太が現れ、平伏し、泣きだす。「あれから人殺しだけはしなかった」。「わたしは信じる」と親鸞。五郎太は恵信尼の懐にとび込む……。 常陸の板敷山は修験道の聖地。ここに拠る播磨房弁円は、親鸞に法論を挑み、誤りあるときは破邪の戒刀を振るって生命を断つ、と……。 法螺（ほら）の響き。雷鳴。山伏の一团が現れる。弁円と親鸞の問答が始まる……。 親鸞に心打たれた弁円は改心し弟子となつて明法と名乗り、念仏を喜ぶのであった。

文暦元（一二三四）年の初夏の朝。草庵の前の道。

教義の根本を述べる「教行信証」の初稿ができた親鸞は、都へ行ってさらに仏典を読み、稿を練って完成させるため、王御前を連れて恵信尼とともに旅立つのであった。――（終幕）

（注）流罪になった法然上人は土佐には行かず、讃岐の地に止まられました。丸亀など、ゆかりの地には上人の伝説が残されています。



観劇後、懇親会に親鸞役の嵐圭之氏などが参加下さいました。「敵を怨むな、私の菩提を弔いながら、人としてのまことの道を求めよ」という父から法然への遺言からこの物語は始まる。そして分け隔てない念仏の救いが説かれる。この素晴らしい教えを伝える「法然と親鸞」を演じられることは大きな喜びであり、もっと多くの人に観劇してほしい、と語っておられました。

親鸞聖人のご生涯にご興味のある方は

千葉乗隆『親鸞聖人ものがたり』本願寺出版社、二〇〇〇

平松令三『親鸞 歴史文化ライブラリー』吉川弘文館、一九九八

など多くの本が出ておりますので、「一読を。」